恋の狂騒曲-クールな飼い主と猫の恋-

結城 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋の狂騒曲ークールな飼い主と猫の恋ー

【Ｎコード】
Ｎ４２２０ＢＡ

【作者名】
結城　綾

【あらすじ】
　真面目一辺倒で面白味のない私、会社は倒産、恋人はなし。一度に色んなことが起きて私は猫の格好をしてダンボールの中に入ってみた。
冗談で捨て猫になったのに、そんな私を拾ったのはいつもクールで無表情の飼い主様。
お持ち帰りされて猫として一緒に住むことに……。

運命のスパイラル

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

私の名前は遠野　美音子、２４歳、無職。
２４歳で無職ってどうかと思うけれど、勤めていた会社が倒産してしまったのだから仕方ない。
このご時勢、個人経営の会社は経営が厳しいのはありがちなことなのだから。

今は職安で失業手当をもらい、昼に就職活動をしながら夜はコンビニでアルバイト。
そんな生活がすでに４ヶ月は経過している。

まったく決まる気配のない就職活動に気持ちはふさがり、支払いが不安になってきたアパートを引き払い父子家庭の家に戻った。
３年間一人暮らしをしていた娘が戻って父は喜んでくれるだろうと思っていたのに、戻ってそうそう父の口から出た言葉に、私の方が打撃を受けてしまった。

「付き合っていた女性に子供が出来てな？　責任を取って今度結婚しようと思っている」
「こ、子供～？」

２４歳で姉弟が出来る……。
しかも出来来婚。

衝撃的な内容にくらりと眩暈がした。

母を病気で亡くしてから父は仕事一筋で、女性の影すらなかったと思っていたのに、いつの間にか付き合っていた女性がいたなんて。しかもその女性は私よりたった５つ年上の２０代だった。

その事実はひどく私を打ちのめした。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

父子家庭の経済状況のことを考えて、私は高校を卒業後、就職した。

入社した時、すでに個人経営の会社は傾きをみせ、高年齢の社員をリストラししたばかりで迎えたたった１人の新入社員。
仕事は８時からのはずが、職場の清掃を言い渡されたせいで朝の６時出勤を余儀なくされ。
就業は５時だったのだけど、当然、サービス残業が待っていて８、９時まで残業が続いた。
そんな状況な為に少しでも会社に近い場所で一人暮らしを始めたのだけど、高卒の給料ではセキュリティのしっかりしたマンションを選ぶことは出来ず、木造アパートが精一杯だった。

薄い壁、歩く度に軋む音。
それでも会社からは近く、自分だけのお城だった。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

今思い返すと、思春期特有の反抗期すらなく、私は真面目一辺倒で生きてきた。

幼い時に母を亡くし、父は仕事で忙しかった。
そんな父に我が侭を言うことすら、私には出来なかった。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

彼氏は高校生の時にいたが、あっけなく他のオシャレな女の子に乗り換えた。
まあ、冗談1つ言えず、まじめな優等生の地味子より、可愛くておしゃべりが上手な楽しい子に気持ちが移ってしまうことは理解が出来る。
高校生の付き合いなんて、どれだけ楽しいかが重要なのだから。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

馬鹿みたいに真面目な人生。
だからってそれで得をしたことなんてない。

２４歳にもなって、今の私は無職。
血縁者の父は、若い妻と生まれてくる子供に夢中。
彼氏もいなくて、これといった趣味もない。

そんなだから、自分で自分が面白味のない人間だということもわかってる。

私だってタブーを犯してみたい。
でも犯罪は嫌だし、変なことは出来ない。
じゃあタブーって何？って考えてみると、ホントなんだろうか？

いつも思考はそこで止まってしまう。
結局、真面目な人間は真面目な思考からはみ出ないままなのだ。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

よく、噂で真面目な人が切れると怖いと聞く。
その話は事実なのかもしれない。

だって今の私は誰が見てもこれからおかしいと思うようなことをしようとしているのだから。

ズズーッ、バタン。
ズズーッ、バタン。

深夜の閑静な住宅街。
だからなのか意外と背後の音が響く。

人気のない道路の端を歩きながら、私の後ろから聞こえる音の大きさに顔をしかめる。

私の容姿は一言で表すなら真っ黒。
きっと闇に解けてることだろう。

長く真っ黒で真っ直ぐな髪。
身長は１５２センチ。
黒いフードパーカーにデニムのショートパンツ。
黒のニーソックスに、紺スニーカー。
頭には黒猫の耳がついたカチューシャ。
ショートパンツの後ろには、黒いファーの尻尾キーホルダーの飾

りがぶら下がっている。

私にしたらこれは猫のコスプレなのだ。

街灯の下にある所定の位置に到着すると、後ろで引きずっていた洗濯機の空ダンボールを置く。

蓋を開いて中に入ろうと跨いだ所、足がまったく下につかない。

踏み台に出来るような物など持ってきていなかったので、きょろきょろと辺りを見回して見るが代用できるようなものはなかった。

「えっと……」

中に入れなければこの計画の意味がない。

どうしたものかと悩んでいると、あることに気づいた。

ダンボールを横倒しにし、先に中に入り、上を押しながら体重をかけて押すと、ダンボールは横に倒れ、ちゃんと立った。

私はダンボールの中に入ったままで立ち上がり、ポケットから極太油性ペンを出すと、蓋についている羽の一面に「ひろってください」と大きな字で書く。

いわゆるダンボールに捨てられた猫の一幕を再生させたのだ。

「準備おっけー♪」

ペンをポケットにしまい、中に座ってダンボールの羽を閉じて蓋を閉める。

これですべての準備は整った。

私はダンボールを持つ取っ手穴から外を覗く。

計画の実行はあと数分後。
私はドキドキする胸を押さえ、ゆっくりと深呼吸をした。

子供じみた意地

私がなぜ夜の道路の端に「捨て猫の一幕」を再現したのかと言えば、それは1ヶ月前に遡る。
夜コンビニでバイトをしている私は、1人のサラリーマンの姿に気づいた。

ほぼ毎日コンビニ弁当を買っていく20代後半くらいのスーツの男性。
背はスラリと高く。
わりと細身。

少しだけ癖のある柔らかそうな黒髪。
切れ長の鋭さのある瞳。
すっと通った鼻筋。
薄い唇。
シャープなアゴ。

ちょっと言い方がどうかと自分でも思うのだけど、私的にはクールビューティーさんだと思ってる。
でも私は容姿が整っているくらいでは興味は持たない。

ある日、いつものように男性の会計をして、缶ビールを袋に入れようとした時だった。
水滴のついた缶が手からすべり、台に落ちて男性の方へ転がっていく。
それを男性は無表情であっさりと受け止めたのだ。
慌てて謝って交換を申し出たけれど、彼はそれを断った。

まあ、こういったことはごく稀ではあるものの起こることだ。
でも、私の場合はそうじゃなかった。

次の日、男性の会計をしている時に、また同じことが起きた。
しかし彼はまた無表情でビールを受け止め、交換を断った。
そしてまた次の日、私は２日連続の失敗に緊張し、またビールを落としてしまったのだ。

３日間連続の失敗。
もうこれは嫌がらせのなにものでもないだろう。
しかし彼は、やっぱり無表情で同じ言葉を言った。

ここで普段の私なら今度こそ失敗しないように注意したと思う。
でも４日目の私は、新しい母親となる人に無理やりに会わされた上に、父が少し離れたのを見計らったその女性に嫌味を言われ、めちゃめちゃ機嫌が悪かった。
そんな私は、４日目になる会計の時、自分でも信じられないけれど、わざとビールの缶を落としたのだ。

アルバイトしてお金をもらっている身で、客に対し、個人的な感情でそのようなことをするなんて愚かとしか言えない。
でも、その時の私はやったのだ。

しかし彼は無表情でビールを受け止め、私に差し出してきた。
そして、私が言うより先に、「交換は必要ない」と一言。

自宅に帰った私は自分の行動にひどく落ち込み、それから２日後に来店した彼に小さな声で前の事を謝った。
彼はそんな私に「客商売をしていれば、時に自分を抑えられない

こともある。俺は気にしていない」と言って、無表情で帰っていった。

それから私は彼と会う度、挨拶をし、軽く声をかけるようになった。

しかし、彼には何を言っても無表情のまま、言葉は「ああ」とか「そうか」「いや」とかばかり。

そのうち私は彼の表情の変化を見てみたいと思うようになっていった……。

そうして今、その作戦を実行すべく、私は捨て猫作戦を実行することにしたのだ。

作戦内容は、夜、帰宅する彼に私がダンボールから飛び出て驚かせるというもの。

脅かし作戦ならきっと無表情の彼も驚くことだろう。

驚いた彼を見るのが楽しみでしょうがない。

わくわくしつつ穴から外を見ていると、しばらくして男性のシルエットが見えてきた。

姿を確認するまでじっと耐える。

心臓がばっくんばっくん音を立てて激しく鼓動し、息が少しだけ苦しくなった。

シルエットは段々と近づいてきて、それが彼だと認識出来た時、一際私の鼓動が激しく打つ。

手が微かに震えている。

こんなばかなことを考えて実行に移したのははじめてのこと。

彼を脅かしたら、脱兎のごとく逃げ出すつもりだ。

彼がすぐ側まで近づいてきた。

私は蓋に手をかけ、思いっきり押しながら立ち上がる。

「にゃにゃーん！」

ばばっと音を立てて、ダンボールから立ち上がって彼を見た。

さて、どんなふうに驚いてる？

私の視界が彼の顔に固定されるが……。

彼の表情は無表情のまま。
まったく驚いた様子もない。

あれ？

作戦の予想とは違う彼の反応に私の方が固まってしまう。

そんな中、彼はダンボールに書かれた文字に視線を落とすと、手に持っていたジェラルミンケースを下に置くと近づいてきた。
予想外の行動に、私の方はまだ硬直したままだ。

彼は両手を私の脇に差し入れるとゆっくりと持ち上げ、私をダンボールから出す。
そして米袋か何かのように脇に抱えると、反対側の手でジェラルミンケースを持って歩き出したのだ。

な、なに？
なんで？

唖然としたまま、脇に抱えられたまま、ゆさゆさと揺られつつ彼に運ばれていく私。

え?

ちょ、ちょっと、なんで~?

抵抗することも忘れ、そうして私は彼に運ばれて行ってしまったのだ……。

自分の気持ち

一定のリズムに揺られ、私は途方にくれていた。

表情を変えない彼の驚いた顔を見るためのイタズラ。
そんなつもりだったのだ。

しかし彼は驚ろくこともなく、なぜか私を拾った。
まったく予想外だ……。

脇に抱えられて運ばれつつも、これからどうしょうか悩む。

女が1人、男によってどこかへ運ばれている。
それがどんな危険をはらむものだということは理解しているけれど、彼がこれからどうするのかという興味もあった。

しかし好奇心を満たすにはリスクが多きすぎるかもしれない。
だって私はまだ男性を知らなかったりする。
結婚する相手に操を捧げるなんて古い考えなわけではないけれど、それでも好きでもない人とそういったことが出来る人間でもない。

私と彼が……。
そう考えた瞬間だった。
胸がきゅっと鳴る。

想像したのはキスシーンだったけれど、彼とキスすると想像してもまったく嫌悪感は湧かなかった。
それどころか鼓動がどんどん早くなって顔が熱くなっていく。

……ちょっと待って？

なんで想像しただけでドキドキするの？

もしかして、私、彼の無表情以外を見たいと思ったのは好きだから？

名前も知らないし、コンビニで会計した時の会話しかしていないのに？

違うと否定して、ここから逃げ出すことを考える。

コンビニのアルバイトは先日、家に戻ってから辞めてしまった。

通うには遠すぎるからだ。

彼は私を探せない。

彼とはもう会うことはないからと、このイタズラを実行する決意をしたのだ。

今逃げ出せば何事もなく普通の日常に戻る。

でも2度と彼とはもう顔を合わせることもない。

……そんなのは嫌だ。

彼の容姿より、「交換は必要ない」と言う彼の低い声が好き。

細身でスーツが似合っていて、長くキレイな指がそろった手が好きだ。

彼の涼しげな瞳が好き。

私は……彼が好きなんだ。

まったく予想外なのは私の気持ちだった。

やっと状況を認識した私が少し動いても、腕一本で人ひとりを抱

えているはずの彼はよろけることもなく歩いている。
細身に見える彼は意外と力があるらしい。
突然自覚してしまった想いに困惑していた私は迷いつつも、結局彼に運ばれるままとなった。

自分の気持ち（後書き）

この後の長さを考えてここで切りました。
修正の時は加筆予定です。

まったく一言もしゃべらないんですが

彼が入ったのは高級そうなマンションだった。
広いエントランスを通り、エレベーターに乗り込むと、彼は最上階の１２階の丸いボタンを押す。

エレベーターはスムーズに最上階に着くとドアを開く。
彼はエレベーターを出ると、誰も通っていない静まった廊下を奥へと進む。
そしてあるドアの前で止まった。

顔を上げて表札を見ると「白井」という名前が書いてある。
そのまま彼の行動を見ていると、彼はドアの横にあるプレートに人差し指で触れると、ピッと短い電子音がして次にカチンと音が聞こえた。
そして彼はドアの取っ手に手をかけ、ドアを開けたのだ。

鍵を出すこともなく、プレートに触れただけでドアの鍵が開く。
そんな最新のセキュリティの場所に住んでる彼は、ただのサラリーマンじゃない？

唖然としていた私が中に運ばれると、もっと唖然としてしまう。

入った瞬間、部屋の明かりが点き、照らされた部屋の中は、黒、黒、黒。
壁が白いのと、銀が時々混じっているだけで、インテリアは黒色ばかり。
真っ黒な部屋だった。

私をガラステーブルの前に降ろすと、彼はキッチンに向かった。
それを目で追う。

彼は大きな銀色の冷蔵庫から牛乳瓶を出し、お皿に牛乳を注ぐと、これまた銀色のオーブンレンジにそれを入れる。
この行動って……もしかして、もしかしなくてもだけど、猫にミルクをあげる行動？

それ以外思い浮かばない私の前に、そのお皿が置かれる。

平たいお皿に入ったミルク。
スプーンもない。

ちょ……、これってミルクを舐めろってこと？
いくら猫のコスプレをしてるからって、猫扱いって……。

困惑しているといつの間にかスーツからゆったりとした服装に着替えた彼が隣の部屋から出てきた。
しかし、その服装はやっぱり上下とも黒。

なぜ、ここまで黒に拘るのだろうか？

彼は真っ黒なコンポに近づき、リモコンのボタンを押す。
コンポからはクラシックが流れ出し、彼は私の横にあるソファーにゆっくりと座り新聞を広げた。
それに比べ、私は床にじか座りだ。

まあ、下にはふかふかのジュータンがひいてあるけれど。

私はミルクの皿と彼の顔を何度か見比べるが、彼は新聞から顔を

上げようとしない。
なんとなくむっとした気持ちになりながら、両手でお皿と掴むと、皿の端に口を直接つけてミルクを飲み干す。

しかし、彼はそれからずっと私を放置したままだった。
私を見ないし、話しかけもしない。
そんな態度がますます面白くない。

勝手に拗ねた私は、暇を持て余し、その場にごろんと横になる。

こうなったらしゃべってやらないんっだから！

床にだら～と寝そべっていると、新聞を読み終わったらしい彼にいきなり抱き上げられた。

いったい何事？と驚いていると、彼は私を風呂場に連れて来た。
そして何も言わずに私の目の前でシャワーの出し方などの使い方を見せてみると、次は洗面所の下から何かを出す。
それを私に渡してきた。

私の手にはハブラシとか、タオル、パジャマまで、しかもやっぱり色は黒。
どうやらお風呂に入っていいらしい。

人様の家でいきなりお風呂をいただくというのもどうかと思うけれど、一人暮らしの男性の家に上がりこんでしまった時点でアウトになっている。
いまさら気にしてもしょうがないと思うことにしてお風呂をいただくことにした。

ボタン1つで快適なお風呂タイムが送れるという贅沢を満喫した私はほかほか。
気分は上昇中。
私が出ると彼は入れ替わるように風呂に入っていった。
泊まるということを想定しなかったので下着の替えを持っていなかった私は、真っ黒なパジャマの下は何もつけていない状態だ。
少し落ち着かないけれど、私の下着はお風呂の説明と一緒に教えてもらった洗濯乾燥機の中に入っている。
乾燥するまでの我慢だ。

勝手に部屋を動き回るわけにもいかないので、最初にいた場所に座って置いてあった新聞を見る。
「日本経済新聞」と書かれた新聞は、私が普段見ているような新聞とはちょっと違う。
興味から新聞には触れずに記事を読んでいると、彼がパジャマを着てお風呂から出てきた。

彼は私に近づき持ち上げて、また脇に抱えて歩きだす。

まるで荷物の移動みたいだ。
まあ、彼にしたら猫を移動させているだけなのかもしれないけれど。
彼が連れてきたのは大きなベッドのある寝室だった。
彼はゆるぎない足取りでベッドに近づき、私をベッドの上に降ろす。

まさか、一緒に寝るつもりなんだろうか？

これにはさすがに焦る。
動揺している私をよそに彼はさっさとベッドに入ると、半分スペースを空けて横になった。
ドキドキしつつ、そのスペースを見る。

これって、私のスペース？

もう目を閉じてしまった彼をちらちらと見ながら、しばらく考えたのち、私はそのスペースにお邪魔することにした。
万が一襲われそうになったら、噛み付いてでも抵抗する覚悟がある。
また、もし襲われてしまったら復讐する気概で彼の横に滑り込んだ。

ふかふかのベッド。
さっきの絨毯といい、彼はふかふかが好きなのだろうか？
なんとも言えないくらい気持ちのいい寝心地に、いつの間にか私は夢の中へと落ちていった……。

PDF小説ネット発足にあたって

　PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4220ba/

恋の狂騒曲-クールな飼い主と猫の恋-

2012年1月14日11時54分発行